ポチの死んだ日

一晩中鳴いた後、明け方に息を引き取った。

冬だったせいだろうか。触れた時、乾いた毛が驚くほど冷たかったのを覚えている。最後の夜は、いよいよお迎えが来るらしいと家の中に入れてやった。その時のダンボール箱がそのまま棺になった。母親がどこからか持って来たらしい紫と白の菊が、頭と尻尾の間にまるで髪飾りのように供えられていた。背中にはポチという名の由来である黒い斑点が一つあった。そう、まるで牛のように、白い背中のまん中に黒い大きな円い模様。その後ろでぶんぶんと振られる太い尻尾。その姿が子供だった私をいつでも、どこまでも引っ張っていった。

十二年いた。その間に、まだ小学生だった私は大学生になっていた。

犬を欲しがった手前、朝夕の散歩は私の日課だった。本当に可愛かったのは最初だけの事で、しだいに生き物を飼うことの煩わしさがわかるようになっていた。庭に穴を掘って糞を埋め、水を換えて。それでもひっくり返して腹を撫ぜると、足をひくひくと痙攣させて喜ぶ。怒らない

のをいいことに下腹部の小さな乳首や臍の跡を探り出し、最後はペニスの先っぽの毛を引っ張って遊んだ。生後三ヶ月の子犬は、なんとも柔らかくて暖かだった。ほっぺたを舐められると背筋がゾクゾクする。腕に抱いてその体温を感じていると、忘れていた何かを思い出すような気がした。

はす向かいの家にはもう一匹の犬がいた。チビという名の茶色い雌犬だった。

その家には、私と同じクラスのヘチャムクレが住んでいた。学校ではいじめてばかりいるくせに、私はなぜかそのヘチャムクレと気が合ってよく家に遊びに行った。その女の子には二歳年上の姉がいた。どんぐり眼の妹とは違い、姉の方は涼やかな目元をしていた。とても色白で足がすらりと長かった。名前をマミさんといった。今なら意識することはないだろうが、この頃の二歳上はひどく大人に見えた。マミさんは私のことをボクと呼んだ。

「やっぱりそうなんだ。子犬の声がすると思ってたけど、ボクの家で飼ったのね」

マミさんに声をかけられると、まるで先生と話しているように、はいといいえしかいえなくなった。今とは違って田舎の小学生はかなりオクテだったのだと思う。マミさんの前でなぜ胸がドキドキするのか、その訳をまるで知らなかった。

小学校の水泳の時間は高学年がみんな一緒なので、よくマミさんをプールで見かけた。マミさんはかなり早熟だったのだと思う。スクール水着を着た六年生の女子の中でも胸のふくらみがよく目立った。そのせいかマミさんはプールではいつも不機嫌な顔をしていて、私もこの時間だけはマミさんに近づくことができなかった。

やがてマミさんは中学に行った。それでも道で会うとマミさんは声をかけてくれた。

「ボク、久しぶりね。元気にしてた」

それだけで、その日がとてもいい日のような気がした。

当然の事ながら、毎朝のポチの散歩ではいつもマミさんの家の前を通った。チビが警戒して甲高い声で吠える。マミさんの家からは朝ご飯の匂いがして、時々生垣ごしに寝間着のまま縁側で髪を梳かすマミさんの姿が見えた。

その頃のことだったと思う。私は何かの用事でヘチャムクレを訪ねた。庭からまわるとヘチャムクレは不在でマミさんが一人で留守番をしていた。私は無謀にもマミさんを子供会の遠足に誘った。私は子供会の会長をしていたので、この時はなぜかマミさんを誘うのが自分の仕事のような気がした。

「行けないわ」

「どうしてですか」

「どうしてって、とにかく行けないの」

「今度の日曜日、何か用事があるのですか」

「そうじゃないけど」

「だったらなぜですか」

私のなぜなぜ攻撃にマミさんは三十分くらい相手をしてくれたと思う。最後にどうなったのかは忘れてしまったが、交渉は決裂して私は不本意なまま家に帰った。辺りは真っ暗で、家では母が待っていた。

「こんな遅くまでどこに行っていたの」

「中川さんのうち」

「何してたの」

「マミさんと話してた」
　なぜかマミさんの名前を出すと、母の声がきつくなった。
「とにかくこんな時間に、他人様の家を訪ねるもんじゃありません。先方にだってご迷惑でしょう」
　それまで帰りが六時を過ぎたところで、そんなに怒られたことはなかった。なぜだかわからないまま母の雰囲気に気圧されて、私は一言『はい』と謝った。

　春になっていた。私は近所のガキどもを連れて夕方のポチの散歩に出ていた。近所をさんざん歩き回った後、私達はマミさんの家の前を通りかかった。庭には久しぶりにマミさんの姿があった。そこで私はいっしょにいたガキどもに尋ねた。
「いま、ポチの鎖を放したら、ポチはどこに行くと思う」
　毎日の散歩で、最近ポチが妙にチビの所に行きたがるのを知っていた。いうが早いか、私は鎖を放していた。案の定、ポチは一直線にチビの方に走っていった。私達はポチを追いかけてマミさんの家の庭に入っていった。ポチとチビはマミさんの前で凄まじい格闘を演じていた。

「やめて、やめてよ」
マミさんが引き離そうとするが鎖に手が届かない。
「ウチの犬、噛まないよ」
私は平然としていった。
「ちがうのよ。離さないとだめなの」
チビは細い牙をむいて、ガァと吠えながら噛みつこうとする。二匹は互いを追いかけるようにくるくると回った。ポチがこれほど真剣に素早く動き回れるのを私は知らなかった。ポチはついにチビを後ろから捕らえた。この時、目の前で起きた事を理解していたのはマミさんだけだったと思う。私達は喧嘩している犬を引き離すと、ポチの頭を引っ叩き、何事もなかったように家に帰った。
数ヶ月たって、チビは五匹の子供を産んだ。私はヘチャムクレに誘われて、さっそく子犬を見に行った。真っ黒、真っ白、茶色いの。それぞれ色が違い、そのうちの一匹は死産だった。まったく覚えていないが、中に一匹、背中に黒い斑点のあるのがいて母はとてもバツの悪い思いをしたそうだ。
チビは幸せそうな顔をして縁の下で子犬に乳を吸わせていた。ヘチャ

ムクレが大喜びなのに対し、そのお母さんはなぜか浮かない顔をしていた。私が行くとシャベルを持って死んだ犬の子を拾い、そそくさと庭の片隅に穴を掘って埋けた。マミさんはこの日姿を現わさなかった。

チビは産後の肥立ちが悪く、すぐにジステンパーにかかって死んでしまった。子犬達も結局、一匹も育つことはできなかった。

それから、かなり長いことマミさんの姿を見ることはなかった。たった一度バス停に向かう途中でパーマをかけて、きつい口紅を引いたマミさんとすれ違ったが、マミさんは私のことをまったく無視して通り過ぎていった。

「あなたは知らなかったでしょうけど、中川さんとこのマミちゃん、山本さんちのご長男を好きになっちゃって大変だったんだから。山本さんのお婆さんなんか、まるでどろぼう猫みたいにいうし…」

一瞬、嫉妬のような感情がちくりと心の中を刺した。さらにもっと大変なことがあったのだろう。あの時、高校生のマミさんがなぜ急に家を出ていなくなったのか。母の口調は思わせぶりだった。

片道二時間をかけて都心の大学に通うようになると、ポチは私の生活から姿を消した。それ以前にポチは散歩が要らなくなるほどの老犬になっていた。

ポチが死んだ時、私は思っていたほど悲しくはなかった。

その頃、私は都会の香りがする新しい女の子が好きになっていた。